

美術科の「やりくり」のたとえば

～「作品との対話」～ 多様な視点で物事を見つめ、その世界観を深める力～
(3年次)～

木村 信一郎

鳥取大学附属中学校 美術科

E-mail: kimura_si2@fuzoku.tottori-u.ac.jp

Shinichiro KIMURA (Tottori University Junior High School) : An example of “Managing for solving problems” in art education. Dialogue through works - Ability to look at things from various perspectives and deepen their views of the world-

要旨 — 「想像力により人間関係を構築してゆく力」の養成をめざして、中学校第1学年の美術科教育での表現と鑑賞活動に、オルタナティブ活動（物事を多角的な視点で見つめることに重点を置いた活動）の導入を試みた。題材として用いたのは生徒自身がそれぞれのテーマを持って制作した「線織面」の作品である。それらを鑑賞して感じたことを相互に出し合い、他者の感じ方を取り入れることで、自己の鑑賞力の幅と深さを高めることを目指した。また、自他の感想を汲んだうえで、その表現として個々の「線織面」をつなげるという課題も課した。このような相互討論の課程の取り入れは、鑑賞力の向上に有効であった。本稿では、その授業実践例についての指導案、用いた資料などを合わせて紹介する。また、他学年での実践、全学年の鑑賞活動についても紹介する。

キーワード — 線織面, オルタナティブ, 作品との対話

Abstract — I have tried to introduce “alternative activities” which emphasize rearing of abilities to look at things multi-directionally to expression and appreciation activities in art education of the 1st grade of junior high school to nurse “ability for constructing harmonious human relations with imaginative power”. Works of “ruled surface” made by students with their own themes were used as materials. The aim of the activity was to develop and enhance breadth and depth of appreciative power, by sharing their impressions obtained through watching those works. An action assignment to combine several works of “ruled surface” into a single patchwork of “ruled surface” was given to students in the class. It was found that introduction of such discussion to a class of art was effective in improving appreciative power. In this article I will show a teaching plan of an example of practice of the class, together with reference materials used in the class. I will also introduce practices for the 2nd and 3rd grades and appreciation activities for all the grades.

Key words — ruled surface, alternative, dialogue through works

I . 美術科の取り組みの概要

1. はじめに

「作品（作者：私・他者＝思い）との対話」

「作品との対話」。「対話」という表現は、意味を調べると“向かい合って話し合うこと。また、その話。”とあるように、互いに顔を見合わせ、声で会話する活動のようにとらえられることが多いであろう。ここで私があげる「対話」とは、アメリカ・アレナス氏が提唱した“思考能力、対話能力の向上を目的に実践される対話による

美術作品の鑑賞法”（＝対話型鑑賞）を示している。たとえば、鑑賞活動であれば、級友、先輩、後輩の作品に対して、直接的であったり、間接的であったり、方法は様々であるが、自分が感じ取った作品への思いを送る活動は、作品を介した「他者との対話」といえよう。教科書や直接出会えない作家たちの作品について考える活動も「作品（＝他者の思い）との対話」と考えることができる。また、制作（表現活動）も「対話」と捉えて授業展開を行っている。例えば、これか

ら描こうとする白い紙、形を作ろうとする素材がなるべく姿、色はなんだろうと自分自身に投げかける表現活動は、作品を介して自分自身の思いを探る「私との対話」と考えることができる。

「多様な視点で物事を見つめ、その世界観を深める力」

国際化、少子高齢化等、様々な変化が進む我が国において、生徒たちを取り巻く未来は予測不可能な世界となると考えられる。近年、アメリカ・デューク大学の調査によれば、『2011年度に小学校に入学した子どもたちの65%は、大学卒業時に今は存在していない職業に就く』という結果が出ている。日本においても同様のことが予想されており、そういった状況の中において、異文化コミュニケーションや世代間コミュニケーションといった多様なコミュニケーション能力は社会人として強く求められる時代となるだろう。そのような世界を担う生徒たちに対し、コミュニケーション能力として「想像力により、人間関係を構築していく力」「人と人をつなぐための能力」が、今後必要であると強く考えるようになった。そこで、先に述べた能力を育てるための美術教育の在り方や方法を、表現と鑑賞の活動を通して広く探求することを目的として本テーマを設定した。

2. 研究の視点

「物事を決まった一方向からではなく、多角的な視点で見つめること」

具体的に「想像力により、人間関係を構築していく力」「人と人をつなぐための能力」を育成するためには何が必要なのか。人は、それぞれ立場や価値観によって物の見方が異なる。物の見方が人によって異なっていることを理解し、「他の人の価値観を理解すること」とともに、「自分の価値観を他の人に理解してもらうこと」が人間関係を構築していくための第一段階である。そのためには「物事を決まった一方向からではなく、多角的な視点で見つめること」を重点においた活動(=『オルタナティブ(もう1つ別の)活動』と定義する)が重要と考えた。たとえば、表現においては、発想や構想したことを材料や用具を使って実際に表現する中で、他者の表現や、意見を取り入れることにより、

よりよいものに高められることがある。創造的な技能においても、発想や構想をしたことが具体的な形として現れ、表現を追求していく中で、技能が高まったり新たな技能を発揮していく。鑑賞においては、他者の考えなども聞きながら、自分になかった視点や考え方を発見し、それらを取り入れながら、自分の目と心でしっかりと作品をとらえて見ることにより、自分の中に新しい価値が作りだされていくことになる。ただ、作品とは、それぞれ制作された時代背景やその時の作者が置かれている状況、性格などが複雑に絡まって生み出されたものである。「多様な視点で物事を見つめ、その世界観を深める力」が身に着いていく授業展開を考える中で、ある程度の知識をやりくりしながら、作品の世界観を深める展開も1つであり、そういった要因を控えて作品自体から伝わる魅力を味わう展開も1つである。そういった作品要因をどうおさえるかという点もその授業ごとに考えながら実践を重ねてきた。授業では、ペアや小グループ、クラス全体など形態を変えながら、表現と鑑賞の活動の中で生徒それぞれが別の視点で考え、共有し高め合う「オルタナティブ活動」を授業で実践しながら研究を重ねてきた。

「鑑賞と表現の流れを一体化した短時間教材の開発」

美術科には、表現と鑑賞の二領域があり、学習指導要領においては、〔共通事項〕を置くように、表現と鑑賞の一体化も定められている。鑑賞には、自他の作品などについて考えや思いを深く追求する活動があるが、それには、「個でじっくりと味わい、考えること」のみならず、「他者と考えや思いを共有し、高めること」が美術教育には求められていると考える。表現も同様のことが言え、自己の満足で終わるものではなく、作品への思いを他者に伝え、共有し、自己の心理を深く見つめ、その世界を表現しようと追求することが必要であると考えた。つまり、鑑賞と表現はどちらも同じく、自分と他者との関係の中で高められるものであると言える。しかし、授業数の減少、表現活動の時間の確保などによって、現状としては、表現と鑑賞が分断化され、鑑賞が単一単元で扱われることが多い。そこで、授業としては、鑑賞と表現の

流れを一体化した短時間教材の開発、実施をしている。これまで身に付けた知識、技能を駆使し、また、自己発信、他者理解を繰り返しながら、一方的な見方に捕らわれず、新たな見方を生徒同士が共有しながら「やりくり」の力を身に付けさせたいと考える。には、ただ知識や技能を教え込んで与えるのではなく、その原理や意味を考えさせ、理解させる必要がある。

Ⅱ. 作品との対話（授業）

1. 題材名

「作品との対話 ～みる・つながる・感じる～」

2. 授業構成

2.1. 教師と教材

本題材は、学習指導要領の以下の点を主とする学習である。

【共通事項】(1)ーア「形や色彩、材料、光などの性質や、それらがもたらす感情を理解すること」

本授業は、個々で主題を設定して描いた線織面の作品を互いに鑑賞し合うことから始まる。自分の言葉で作品について説明、また他者の作品について語る中で、線や形、色彩が持つ力に気付かせたい。その後、各生活班（4～5名）単位で互いの作品の共通項や形の類似点などを見出し、線織面で繋いでいく活動を行う。共同制作を行う中で、個を大事にしながらも1つの作品として、全体を見る活動の中で造形的なよさや美しさを深く理解させたい。クラス全体で共有する発表の場面においても、それぞれの作品の印象を伝えたり、自分たちの作品について語る活動の中で、個々の価値意識を持ち、互いの考えを共有しながら味わう鑑賞の楽しさを実感させたい。

2.2. 子どもと教師

本時は、生徒にとって、共同で行う最初の表現活動である。「鑑賞の能力」においては、普段から生活の多くの時間を共有してきた生活班で、個と全体を考えながら、作品の配置、繋げる線の数、角度で、自分の思いを周りの思いと折り合いをつけながら描いていく「やりくり」

する姿を授業で目指したい。また、自分だけの一方的な見方ではなく、級友からの新たな視点を共有し、高め合う活動を実践しながら、作品を深く見つめる楽しさに気づかせたい。「発想や構想の能力」においては、それぞれの主題で描いた自他の作品の魅力について、互いの思いを語り合う中で、気づかせたい。また、自他の作品のよさに気づき、どのような表現、配置で繋いでいくのか、全体としての造形表現を楽しみながら発想を広げていく生徒の姿を授業の中で目指したい。

2.3. 子どもと教材

1年生は、小学校の図工で培ってきた造形技能を応用し、発展する活動として、「つづく」「奥行き」「グラデーション」といった抽象的な主題を置いて、デザインの基礎表現、色彩の学びを4月当初から展開している。現在は、それらの学びを総括すべく平面構成の作品に取り組んでいる。本題材は、デザインの基礎表現の1つとして扱った「線織面（せんしょくめん）」を発展させたものである。線織面との初めての出会いにおける生徒の反応は、「直線を引いただけなのに様々な表現があることに驚いた。どんどん発展させたい」、「直線を書くだけで人の心を動かせることはとてもすごかったです」、「今までなぜ気付かなかったんだろう。もっとこの表現で自分の思いを表したい」など大きなものであった。その線織面を使って、自分なりの主題を持って取り組む本題材は、学びの成長が著しく表れると考える。また、ただ単に自分の主観だけにとどまらず、他者からの作品への印象などを取り入れながら、互いの作品を繋いでいこうと「やりくり」する学びの過程を定着させ、造形的なよさや美しさを追求しようと作品に向かう意欲を高めたい。

3. 本時について

3.1. 本時の目標

- ・線の数や角度、色等を考えながら制作する活動を通して、自分らしくのびのびと表現することができる。

【発想や構想の能力】

- ・自分の作品と他者の作品を組み合わせる活動

を通して、互いのよさに気づき、意見をまとめることができる。

【鑑賞の能力】

3.2. 期待される生徒の様相

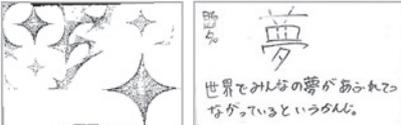
【発想と構想の能力】

- A：想像した世界などを基に主題を生み出し、線や形のもつ効果を考えながら、構想を練り、友達の表現のよさなどに気づき、自己の表現を高めて表現することができる。
- B：主題に基づいて、線や形のもつ効果を考えながら、構想を練り表現することができる。
- C：主題に基づいて、線や形のもつ効果を考えながら、構想を練ろうとしている。

3.3. 学習の展開

【鑑賞の能力】

- A：意図や表現の工夫などを想像するなどして、自分の価値意識をもって作品を味わうことができている。
- B：意図された線や模様、また偶然性による美しさなど、意図や表現の工夫などを想像するなどして、自分の価値意識をもって作品を味わうことができている。
- C：意図された線や模様などについて着目し、意図や表現の工夫などを想像するなどして作品を鑑賞しようとしている。

学習活動	○主な発問・予想される生徒の反応	・留意点○評価【観点】(方法) ※手立て	時間
1. 学習のめあての把握をする。(5分)	○線織面との出会いはどうでしたか。 ・直線が曲線ようになっていくのがおもしろい。 ・すごい表現方法を知ることができた。 ・もっと発展させていきたい。 ・家で発展させてみた。	・振り返りや随想を表示し、線織面との出合いを振り返る。 ・パワーポイントで作品を表示し、本時の制作過程を理解させる。	5/5
2. 自他の作品を鑑賞する。(8分)	○互いの作品紹介をしよう 	・制作した作品について振り返る。 ・生活班を用い、互いの作品を鑑賞し自分の印象も伝える。 	8/13
3. 互いの思いをくみ取りながら折り合いをつける。(20分)	◎互いの作品の印象などから配置を決め、つなげていこう ・共通項を見つける。 ・自他の作品から感じる思いを伝え合い、類似点を見つけつなげていく。 	・トレーシングペーパー上に作品を貼り付け、線で繋いでいく。裏面からでも可とする。 ○互いの作品のよさに気づき、意見をまとめようとしている 【鑑賞の能力】(観察、ワークシート) ※作品からの印象を伝えるように声掛けをする。	20/33
(12分)	○全体で共有しましょう。 	○線のもつ効果を考えながら、心豊かな表現の構想を練っている。 【発想や構想の能力】(観察、作品) ※組み合わせの視点として共通点や相違点などを示す。 ・印象に残った作品について発表。それを受けて、制作した班に思いを発表してもらおう。	12/45
4. 本時のまとめをする。(5分)	○今日の活動を振り返ってみましょう。 ・異なる思いをつなげる活動が楽しかった。 ・みんなの考えを反映させながら作る過程が面白かった。 ・もっとたくさんの人とつながってみたい。	・ワークシートに記入 ・作品の横にホワイトボードを掲示させる。	5/50

4. 他学年の実践例

4.1. 作品との対話～みる・なる・しる～

第3学年年度当初に実施。学習計画は全2時間。自画像を制作する導入として実施。作品の内側に自分を置き、みる側になにを伝えるのかをグループで意見を交わしながら、自身の作品への意欲を高める活動。学習指導案等は平成28年度鳥取大学附属中学校研究紀要を参照。



図 4.1. 授業時のワークシートより

4.2. 作品との対話～刷る・感じる・つくる～

第1学年後期に実施。学習計画は全1時間。版画作品を制作する導入として実施。「〇〇な風」をテーマに制作し、多くの視点から作品の印象を受けとり、自らの思いを深めるようにタイトルを付ける活動。学習指導案等は平成27年度鳥取大学附属中学校研究紀要を参照。



図 4.2. 授業時のスライドより

Ⅲ. 作品との対話（展示）

1. 文化祭展示の部

鳥取大学附属中学校の文化祭は、[ステージの部]、[展示の部]と2部構成で長い期間に展



開されている。[展示の部]においては、美術科、国語科、社会科、英語、理科、数学…と展示作品は多岐にわたる。そこには、その生徒の思いや伝えたい言葉が詰まっている。学校全体で鑑賞するに当たり、作者、鑑賞者の学びがより深まる活動として図1の鑑賞法を実施した。

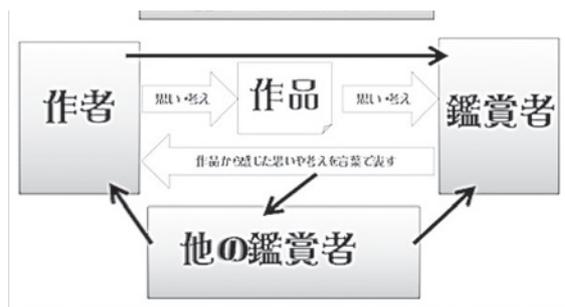


図 1.1. 作品との対話 鑑賞の図

鑑賞する際に、作品から感じた思いや考えを鑑賞カードに記入し、作品の近くに掲示させた。作者はそれを観て、自身の作品を振り返り、作品への思いを深める。さらに他の生徒が鑑賞者の思いや考えを観てその作品を鑑賞し、学びを深める。そういった仮説の上で行った活動では、

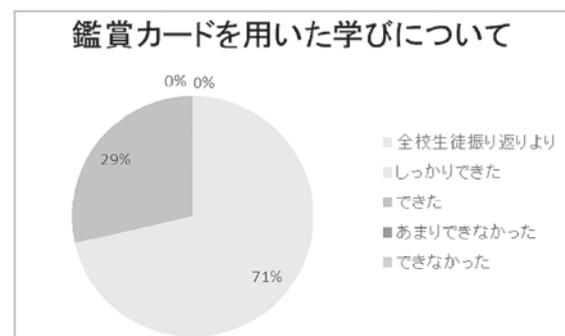


図 1.2. 鑑賞振り返りより

図 1.2. が示すとおり、鑑賞活動に充実した学びを見出す生徒が多くあった。作品に寄せられた鑑賞カードは、振り返りの時間に生徒自身に返し、作者から鑑賞者へメッセージを送る活動も行ったが、展示会場にて鑑賞カードを介して作者と鑑賞者のやり取りをしている文面もあった。鑑賞カードの大きさ、掲示のスペース、鑑賞時間の確保など、課題はまだあるが、作品との対話活動から広がる学びの姿が次年度も充実するよう、進めて行きたい。

2. 国際交流生徒作品展



鳥取大学附属中学校は、国際交流教育の一環として、スペイン・トルネリスとの交流を定期的に行っている。美術科では、平成 22 年度よりスペイン・ムルシア市にあるカスカレス中等学校との間で美術作品を通じた国際交流を行っている。附属中学校は、交流の記念として平成 25 年より、国際交流生徒作品展を開催している。

私は、2015 年から本作品展の全体構成を担当する立場にある。本作品展は、「生徒作品展」とあるように始まった当初は、美術作品を中心に展示する内容であった。しかし、本作品展は学校外の会場にて開催し、広く地域の方に触れる機会となる。そこで、附属中学校の教育を学校外の方々に広く知っていただく場への展開を図ってこれまで行ってきた。今年度は、昨年度からの英語科、理科、社会科に加え、数学科にも参加していただいた。今年度は 6 日間で、のべ 308 名の方にご来場いただいた。会場でお会いした来場者は、「作品」という言葉に展示物の内容が多様なことに驚かれる方が多く、美術

一卒業生としてみさせていただきました。当時はただ、教科だけの勉強をしていたと思っていますが会場に来て大変すばらしいはっけんをさせていただきました。将来の若人でするので楽しみにご活躍をみまもりたいと思います。

他校を知りませんが、郡部では無い高度な作品展だと思っています。

自分の中学時代とは全く違う学習が行われているのに驚いた。先生方は準備等大変だと思うが、是非今後も続けてもらいたかったです。

すべての作品が中学生としてしっかりと制作されており、大変参考になりました。性格がしっかりしています。

附属中学校の日頃からの活動に敬意を表します。どの作品も素晴らしいものばかりでした。

こういった取り組みがあると、附属がどういったことに力を入れているかがよく分かる。

毎年楽しく拝見しています。どのような取り組みをしておられるかよくわかるので、今後も続けて頂けたらと思います。

自分の中学時代と比べて、いろんな経験をさせて頂き視野を広げるきっかけを作って頂いていることに感謝しています。

館内掲示や案内もたくさんされていて、興味をそそられました。ペンタゴンブックカバーというお土産もあり、来場者にはとてもうれしいです。

本物のお菓子のように粘土で作っていたのすごかったです。ぼくは今小学2年生だけど中学生になったら附属に行こうと思いました。

図 2.1. 来場者アンケートより

作品以外の展示物にも興味を示す様子がみられた。図 2.1. アンケートの言葉には、地域における附属中学校の存在や求められるものが込められており、附属中学校の学びを多くの方々に知っていただく機会となったと考えられる。また、アンケートの一部は、授業の中で紹介し、生徒の授業への意欲につなげていきたいと考えている。こうした実績からこの作品展は、1つの学校の行事として取り組んでいきたいが、校内の理解や組織など、運営の点においては課題がある。次年度も本校の学びが広く発信させる機会になるように、学校全体で取り組む体制を作り、発展させていきたいと考える。

IV. まとめと今後の課題

[作品との対話 - 多様な視点で物事を見つめ、その世界観を深める力 -] = [生徒の学びの充

実] + [限られた時間数] = 鑑賞と表現の流れを一体化した短時間教材の開発

取り組みの概要で述べた通り、これまでの取り組みを発展させながら、学びを充実させる鑑賞と表現の流れを一体化した短時間教材の開発に年間取り組んできた。授業実践で紹介した内容もその一つで、授業後の話し合いでは、次のような点が今後の課題としてあげられた。

1. [形・色の繋がりと思いの繋がり]

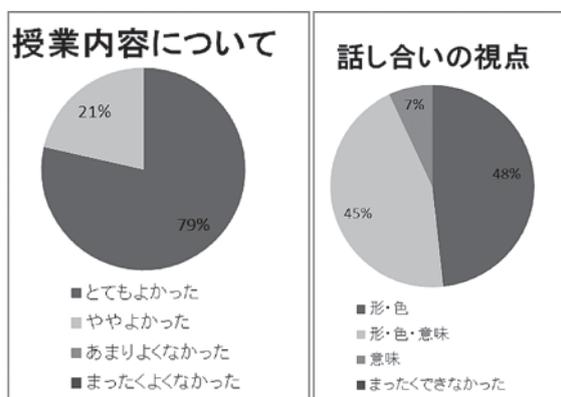


図 1.1. 授業後振り返り集計より

図 1.1. より、生徒は当初、線織面の形のみで制作を行うことが予想されていたが、個々の思いを受け止めたうえで、繋げる形、線の色を工夫する姿がみられた。これは、普段から全教科において話し合い活動を実施していることが1つの要因としてあげられる。また、本授業においては、学習過程でも示したとおり、互いの思いを伝え合う活動を設定した上で作業を行ったことも要因といえる。1年生という成長過程を考えると、単に話し合いましょうと指示をしても、目に入る形や色の印象が強く、どう繋げるかという作業が先行してしまうことが予想された。そこで、話し合いの手順を体感することを踏まえて、伝え合う活動を設定した。その後実施した [4.2. 作品との対話～刷る・感じる・つくる～] の授業では、話し合う活動の場面で、個々の思いを伝え合い、受け止めて作品を仕上げる様子がみられた。

2. [教材と学びのつながり]

図 2.1.2 は授業時に生徒が班で共同制作した作品である。作品は、線織面で繋げるといっ

は共通しているが、表現としては、図 2.1. が具象であるのに対し、図 2.2. は抽象的であった。全体としては、どちらの表現も半々であった。私は、2.3. でも記したとおり、生徒は抽象的な表現を示すと考えていたが、実際の生徒の姿には抽象表現から

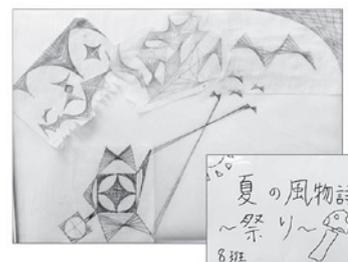


図 2.1. 授業時作品

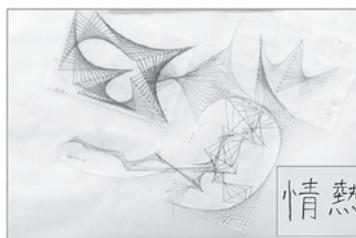


図 2.2. 授業時作品

具象表現と両方の表現を味わう姿がみられた。授業は、生徒の様々な「やりくり」による学びの高まりの場であると考えている。そうであれば、教材はあくまで学びのツールである。この授業において、生徒が教材から「やりくり」し見出す学びは私の予想をはるかに超えるものであった。今後も、生徒の学びをより広く、より高まることを大事にするのであれば、私自身、もっと柔軟な考え方と広い視野を持ちながら研究を重ねていく必要がある。「表現」と「鑑賞」の活動の中で、生徒がすでに習得している知識や技能を用いて試行錯誤しながら取り組む「やりくり」の体験と併せて、作品を通して、他者の考えを受け入れ、多様な視点で物事を見つめる経験も重ねる中で、今後もよりよい学びを授業や行事を通して展開できればと考えている。

文献

永田佳之 (2005) オルタナティブ教育。－国際比較に見る 21 世紀の学校づくり。新評論 (東京), 368 pp.

文部科学省 (2017) 中学校学習指導要領解説美術編。文部科学省, 6-140 pp.

上野 行一 (2001) まなざしの共有—アメリア・アレナスの鑑賞教育に学ぶ。淡文社 (東京)

鳥取大学附属中学校 (2016) 自立し、つながり、探究し、創造する力の育成やりくりのたとえば

